緑の森のかなたから……

今野尚子

龍骨車は江戸時代前期に畿内を中心に用いられていた揚水機である。中国から伝来したもので、中国の文献ではすでに蘇東坡や陸放翁の詩などにみられる。中国では「翻車」のほうが古い呼称であったらしく、「翻車」は『後漢書』にすでにみえる。『三才図会』には「翻車、今人謂龍骨車也」とある。『農政全書』の「翻車」の図と、石河流宣の手になる『大和耕作絵抄』の「懸水」の項にみられる図とはよく似ている。いずれも細長い箱が水路から田地のほうへわたしてあり、その中を横に並んだ何枚もの板が下から上へ移動して水を汲み上げる。両脇に人が二人いて、棒を足で回転させることによってこの装置を動かしている。箱の中の横板が「龍骨」を連想させたのであろう。ところで問題はこの「龍骨車」をどう読むか、である。

さきほどの『大和耕作絵抄』にはつぎのようにある。

用水のたよりをもとめて田に水口をこしらへ水を入るに田地は高く水ふかき時は流いらすゆへに龍越といふ物をこしらへて水をせき上ているゝなり

右の「龍越」という表記と振りがなとから「リューコシ」とよんでいたことがわかる。「越」は明らかに「コシ」のよみに対応するからである。江戸前期の俳諧師安原貞室の『かたこと』の中にも、この語についての記述がみられる。

一龍骨車を　りうこしといふは如何りうこうしやとはいふべき歟

「りうこつしゃ・りうこし・りうこうしや」と三様の表記をこのように記述しているところから考えると、右のかな表記は実際の発音を反映しているとみてよいであろう。これによれば「りうこし」は「かたこと」(=俗言)であり認めがたいが、「りうこうしや」はいい、ということになる。

辞書類をみるとまず『元亀二年京大本運歩色葉集』には「龍骨車」とある。

節用集伊勢本略本のうちでは天正十八年本類にのみこの語がみえる。黒川本・堺本・早大本・阿波国文庫本の財宝部に「龍骨車」(阿波国文庫本のみ竜)とある。財宝部とは少し妙な感じであるが、これらの節用集には器財や器用にあたる部がなく、全体を見わたすとやはり財宝部が妥当であることがわかる。伊勢本増補本系の広本には器財門をたてており、ここに収める。「龍頭」の下に「一骨車」とあり、傍訓は「リョウコツシヤ」ということになる。印度本のうちでは枳園本のやはり財宝部に「龍骨車」とあった。「リウコウシヤ」は『かたこと』の第三の語形「りうこうしや」に一致する。易林本は原刻・平井板ともに財宝部に「龍骨車」を掲げる。これら古本節用集で「龍骨車」を項目として収めるものは必ずしも多くなく、傍訓はほとんどが

「リウコッシャ」であること、がわかる。

ところで江戸期に刊行された『合類節用集』にも「龍骨車（リウコッシャ）〈翻車／云〉」とある（以下〈〉内は細字双行を、／は改行を示す）。ところが同じ江戸期刊行の『和漢音釈書言字考』には「龍骨車（リウコシヤ）」とあり「リウコシヤ」という訓がみえる。註は〈東坡註　江浙ノ間人／名ニ水車ヿ為ーーーー〉とする。この「リウコシヤ」という語形は近世には数多く見出すことができる。

それよりさきにしぼむ身はあすのあさ日
に此からだほさんさらさんあさましとす
がる涙のりうこうしやにあひの水さへま
かすらん

右は近松門左衛門『心中刃は氷の朔日』の下之巻の一節であるが、ここにも「りうこしや」がみえる。このように近世になると「リウコッシャ・リウコシヤ・リウコシ」の語形がみられるが、伊藤東涯の『応氏六帖』にこの三つの形を見出すことができるのである。『応氏六帖』については前号でもふれたが、中国文献に出典をもとめた語彙集で、元禄年間ごろの成立と考えられる。語数は写本によって二〇〇〇～六〇〇〇と幅があるが、書名の示すとおり六帖十八箋の意義分類によって語を収める。その中でこの「リウコッシャ」は器用箋に「水車・翻車」という見出し語の傍訓として掲げられている。国会図書館本で例をあげる。下巻三十五丁裏一行目に「水車」が、三行おいて五行目に「翻車」がある。

水車（リウコッシヤ・リウコシ）〈郷――官践車　翻車　正渇兎水龍〉
翻車（リウコッシヤ）〈三才――今人謂龍骨車也／牛轉―
―水轉―〉

『応氏六帖』の写本九本の中では、神宮文庫本・早稲田大学本・無窮会本・多和文庫本が国会本と同様である。山田忠雄氏蔵本は「水車」に「ソウコッシヤ○ソウコシ」のように付訓し、「翻車」には訓がない。以上の六本には「リウコッシヤ○リウコシ」の二形がみえるのである。ところが静嘉堂文庫本・長澤規矩也氏蔵本・東京大学本では「水車・翻車」にともに「リウコシヤ」の訓が付されているのである。この状況をどのように考えるか。

東涯の勉強ノートともいうべき『紀聞小牘』では、第五冊に「翻車（リウコッシヤ）」がみえる。また『名物六帖』には見出し語として六種類の「リウコッシヤ」を掲げており、訓はいずれも「リウコッシヤ」である。六種の見出しとは「龍骨車・踏車・人踏翻車・水車・翻車・践車」である。『名物六帖』は『応氏六帖』と同じく東涯の語彙集なのであるが、『名物』は東涯の死後も古義堂の人々の手によって増補の努力が続けられた。一部は刊行もされ、『名物六帖』の名は漢字に関わる人々の間ではかなり高かったようである。後の漢字辞書に与えた影響も多く、たとえば釈大典の『学語編』は凡例に『名物六帖』の名をあげる。ところがこの『学語編』では「渇兎・水龍・車扇」の三語を掲げ「渇兎」に「リウコシヤ」と付訓している。また『雑字類編』も『名物六帖』の影響をうけたとされており、『名物六帖』の「人踏翻車」を除く五語を見出しとして掲げるが、傍訓はやはり「リウコシヤ」である。

龍骨車は名称とともに中国からもたらされた。表記からの素直なよみは「リュウコッシャ」であろう。あるいは「リュウコッシャ」かもしれない。ところが近世初期に、水を田へ越させるという意識から「リュウコシ」という呼び方が生まれた。しかしこれは『かたこと』にみられるように正しくないよび方だという認識も一方にはあった。おそらくこの二つのよび方が混淆して「リュウコシヤ」という名称が生まれ、近世後期にかけて勢力を拡大していったのではないだろうか。